

JOHANN SCHEFFLER

横 山 滋

Sigeru YOKOYAMA : Johann SCHEFFLER

(1957年9月20日受理)

Johann Scheffler (Angelus Silesius) は 1624年 Breslau に生れた。幼なくして両親を失ったが(父13才, 母15才), 幸い資産には恵まれて居り Strassburg, Leyden, Padua の大学に学んで医学を治めた後, 1649年, 新教派の Öls 公の侍医に任ぜられた。彼は学生時代からすでに, 神秘主義や 敬虔主義に関心を向けていたが, この思想方向に決定的影響を与えたのは, Öls 近郊の荘園に住んでいた, 当時著名の神秘主義者 Abrapham von Franckenberg (1593—1652) 及び彼を中心として集った神秘主義者達との交友であつた。ここで神秘主義詩人 Scheffler が誕生する。彼は其後1652年 Öls での職を去り, 翌53年カトリックに改宗した。其後, 皇帝 Ferdinand 三世, Breslau 司教に仕えたが, 此の間1661年司祭になった。また, 改宗後の彼は次第に反宗教改革派の熱心な論争家・宣伝者になった。職を辞した後は, Breslau の聖マタイ修道院に入り, 1677年そこで没した。

バロック時代は30年戦争(1618—48), 及び戦後の時代であつた。戦争の結果社会は疲弊し乱れていた。均衡と調和ある新しい時代を求める人々の努力も直ちには達成出来なかつた。不安・分裂・混乱がバロック時代の二元的な人間像を特色づけている。だがこの時代は同時に——宗教改革の後を継ぐ——近世誕生の産みの苦しみの時でもあつた。

この時代のドイツ文学の概況の中から Scheffler の理解のために必要なことを挙げておこう。1) これ迄の貴族階級・民衆に代つて, 中流階級が文学の荷い手になり始めて来た。2) Hamburg, Sachsen, Schlesien が文学の主な舞台であつた。3) ドイツ語・ドイツ文学の改革が Opitz 等により企てられ, 韻律学の上でも著しい進歩が見られた。4) 文学は世俗的なものと宗教的なものとに分かれていた。

個人の内面的なものを問題にする宗教的態度が新しい

文学を促進させるのに力があつた。各宗派の硬化に不満な宗教的情熱が人々の魂をして直接, 神に対せしめたのである。その一つの表われが神秘主義の復活であつた。

Scheffler の遺した作品は, 宗教的論争文など及び僅かの詩を除くと „Cherubinischer Wandersmann”, „Heilige Seelenlust”, „Sinnliche Beschreibung der vier letzten Dinge” の三冊である。(以下それぞれ C. W., H. S., S. B. と略す) C. W. の1—5部は1657年に出版され, 1675年第6部を加えて二版が出された。H. S. の1—3部は1657年に, 第4部はその後独立して出版され, 更に1668年に第5部を加えたものが出版された。S. B. は1675年に出版された。

C. W. の成立時期及びそれの受けている影響についてはカトリック派の人々と非カトリック派の人々との間で説が分れている。それは C. W. をカトリック的に解釈するか否かということになるのであるが, C. W. がカトリック的傾向を示す箇所を含んでいるにせよ, 全体としては非カトリック的なものであることを認めざるを得ない。これはむしろ非宗派的な性格の作品である。従つてその1—5部は彼の改宗以前, 彼がまだ Franckenberg 等との交友関係にあつた時期に書かれたものと思われる。そうして, 中世以降彼の同時代にいたるまでに出た新旧両宗派を通じての神秘主義者達の影響が認められるべきだ。就中, この作品は Franckenberg の友人で Scheffler とも交りのあつた Daniel von Czepko(1605—1660)の“Sexcenta Monodisticha Sapientum”(1640—47)に内容・形式共に依つたものである。

Scheffler の作品に——形式的にも内容的にも——独創性の無いということは, 彼がすぐれた詩人である事を否定しないし, この時代の習慣を考えれば不思議な事でもない。この時代には今日のような独創性という観念がまだなかつたし, 個性的なものが読者から要求されてい

たのでもなかつた。先人の詩の一部分をそのまま自分のものの中に取り入れても剽窃にはならなかつた。

C. W. を理解すべく重要なものは Antithetik の用法である。この事は Scheffler の二元的な思想・性格を示している。だが詩的形式を直ちに個人の性格に結びつけてはならない。何故ならば、詩的形式は学び、伝えられるものだからである。或る時代に広く行われる詩的形式の性質については歴史的にも考えられねばならない。バロック時代に於ては詩的形式は個人の体験の直接的な表現形式として用いられたのではない。それは社会の歴史的所有に属するものであつて、自己の作品を、公衆の前に示すべく、立派に仕上げるための道具、いわば職人的な腕の見せ所と考えられていた。それは間接に作者の内面性と関係を持つていたのである。

さて B. v. Wiese は C. W. に於ける Antithetik を次のように説明している。詩の構成の点から見ると、A 対非 A という矛盾的 (kontradiktorisch) 対立、A 対 B という反対的 (konträr) 対立、これが変化した A は非 A なり、A は B なりという非合理的な対置という形式が認められる。また Bild (Gleichnis) についても同様の配列形式が認められる。例えば完全性と不完全性、神と悪魔、時間と永遠といった工合である。C. W. の Alexandriner 二行詩の詩形はこの Antithetik に適している。一行は中央の休止によつて二つに分けられ、更に第一行と第二行とが相対する二部分になり得るからである。最も簡単な場合を例にとれば、第一行の前半と後半が対立を示し、それが第二行に於て解決せられ止揚される。このようにして、簡単な詩形でありながら緊張と変化をもたらされる。更に、A 対 B 或は A 対非 A という対立の合理性が非合理的な A は B なりというものに変化した時、この非合理的なものがかえつて、より高い次元での真実を獲得した時、この非合理的合理性が規則的に厳密な詩形と対照されることにもなる。

この Antithetik は、言葉では表わし得ないものを言葉で表わそうという神秘主義文学の本質になつてゐる。それでは Scheffler が述べようとしたのはどのような思想であつたかを上の方法との関聯に於て簡単に述べよう。彼が求めたのは哲学的或は宗教的な世界観の体系ではなかつた。彼の出发点及び帰結点は宗教的体験である。彼が求めたのは不完全な地上存在としての人間の救済であつた。それは先ず人間存在の不完全性の認識に始まる。地上世界が不完全であり、無常、有限であるという事は、他の完全なもの、天国の存在を知り、それとこ

れとを対置させる事によつて生ずる。だが真の対立関係は天国と地獄の間にあるので、地上世界は此等とは隔絶したものであるが此等の性質を含むものである。天国と地獄という超越的なものはそれ自体では現実となり得ない。此等が現実になり得るのはこの地上に於てである。三つの世界は静的に考える時は互に隔絶しているが、動的に考えた場合には互に交互作用的な関係を持つてのである。

この関係は神・人間・悪魔の三者についても同様である。神と人間、この本質的に異なつた二つのものを結びあうとするとそこには矛盾が生ずる。神は完全な存在であつて人間とは何等の係わりを持たない。だが神自身もまた矛盾した存在なのである。彼は何物に対しても無関心であると同時に万物を限りなく愛する。愛が動因となつて、そこに、不可能が可能に變じ、矛盾が解決される。即ち神秘主義の根本をなすところの unio-Erlebnis が思弁的になしとげられる。そのような高所に於ては人間は神と一致し、神と同様に本質的である。そうして人間が神無しでは存在し得ないように、神も人間無しでは存在し得ない。神と人間とはそのような関係になる。静的な対立関係の矛盾は動的に解決されるのである。

ここに Wiese の引用している一例を挙げておこう。

So viel die Seel' in Gott, so viel ruht Gott in
ihr, / Nichts minder oder mehr, Mensch glaub e, s
wird er dir.

(I 167)

このように論理的 Subjekt と Prädikat が逆になる場合を彼は Umkehr と分類して、これは神と人間の関係に概ね用いられていると言つてゐる。

C. W. は全体として非常に思弁的な作品である。だが Scheffler の内には思弁性と感情性との二つの面があつた。彼は思想家であると同時に詩人であつた。そのため C. W. に於ても内容と形式とが完全に一致していないところがうかがわれる。思想家としての彼は理知的思弁によつて偶然のために蔽われた人間の本质を解明し、神への通路を見出し、それを理知的形式の中で表現した。(この思弁性の側から——バロック風の表現形式を取除いて——見ると、彼の思想が中世神秘主義の伝統に如何に深く根差しているかがわかる) しかしそれは平板な説明や思想の形態では決してなかつた。彼の思想は独創的なものではないが C. W. を意義あらしめているのは、それが彼の深い内面性、激しい宗教的情熱に貫かれてゐるからである。詩人としての彼を思想家としての彼に對

置させているのはこの感情性、具体的には、バロック詩人としての Formwille である。そのために、抽象的な対象、例えば非人格的な神は想像力によつて変形され、より感情的・感覚的な対象、例えばキリストへと変化して行く。また、思弁的な Gottlehre に代つてより実人生的な Lebenslehre が述べられるようになる。理論的な Antithetik の手法、多彩な想像力の働きに厳しく整えられた Alexandriner 詩形はより自由で音楽的なもの (Lied) になつて行く。

C. W. と其後の二作品との間には大きな相異がある。Scheffler の二番目の作品 H. S. は C. W. と同じ年に出版されているが、明らかに彼のカトリックへの改宗後に書かれたものである。C. W. にも既に彼のカトリックへの道を予示したところはあつたが、全体として C. W. は超宗派的 (むしろ新教的・時には異端的) なものであつた。H. S. に於てはそのようなところが——意識的に——姿を消して、ここにはカトリック詩人が姿を現わしている。彼の改宗の原因については幾つかの理由が挙げられる。それは、愛を強調するカトリックの教理への共感、新教の Orthodoxie への反感、Öls の宮廷牧師との不和などである。だが我々にとつてはそれよりも、彼の改宗の意義、結果の方が重要である。

一体、この時代の神秘主義者の宗派に対する関係はどのようなものであつたのだろうか。中世に於ては神秘主義は教会から逸脱した異端的傾向を持つていた。17世紀に於てはそれはカトリックからのみではなく、新教からも逸脱した傾向を持つていた。しかしそれ自身一つの宗派をなしていたわけではない。神秘主義は超宗派的な立場であつた。だがこの事は直ちに神秘主義者は無宗派であつたという事を意味しはしない。この時代にもまだ宗派的 Entweder-Oder は不可避であつた。彼等は結局は何れかの宗派に属していたのだ。彼等は宗派的ドグマによつては満たされず、敬虔な心情、神への強い憧憬の念に動かされて、思弁的に或は感情的に、自から神を見、神と一体になる事を望んだ。だが彼等が厳密な意味での神秘主義者として超宗派的であつたのは生涯の或る時期に於てのみであつた。彼等は再び宗派の枠の中に帰り、或は他宗派の枠の中へ改宗する事になつた。

H. S. では C. W. に見られた思弁性が非常に弱められている。それは先に述べたような Scheffler の変化によるものではあるが、一つには此の詩集の目的にもよる。それはこの詩集が、人々をして世俗的な関心から離れさせ神の愛に向わせるという教化的意図の下に書か

れ、楽譜を附して出版されているからである。かつての鋭い神秘主義的思想はここではカトリック的な枠の中にはめ込まれている。これは当時流行していた牧歌詩である。牧歌詩は前時代から作られて来ていたが、バロック時代にはその絶頂に達している。世俗的恋愛詩にも、宗教的モチーフ(キリストについての)にも用いられた。感傷的・技巧的性格を持ち、しばしば Schwulst, マネリズムに陥つた。H. S. は各部分がそれぞれ一つの Lieder-Zyklus をなし、キリストの一生を魂の彼に対する感情的・感覚的な愛を通じて物語つていく。unio-Erlebnis は Bräutigam としてのキリストへの Braut としての魂の合一によつて表わされている。ここで Scheffler は雅歌に発し中世の女流神秘家達に見られた Affektmystik の伝統に立つている。直接の影響としては Friedrich Spee などが挙げられる。ここには時として空虚な形式、Schwulst に陥つた箇所も見られる。だが H. S. は社交詩という形式の中に於いても、作者の強い内面性をうかがわせる。そうして、バロック詩人としての Scheffler はここで彼の手腕を最も優美に發揮している。この詩集中の詩には今日でもなお歌われているものがある。

晩年の Scheffler はもはや以前のような深い精神、心情を持つた詩人ではなかつた。彼は次第に Schlesien に於ける反宗教改革派の熱狂的な論争家、宣伝者になつて行つた。死の2年前に出版された最後の作品 S. B. は、かつてのすぐれた神秘主義詩人の面影を僅かに偲ぼせるのみである。この詩集は4部に分れ、死、最終審判、地獄の苦しみ、天国の幸福をあつかつている。それは殆んど読むに耐えないまでに大げさな粗野なものである。何よりもそこには深い内面性が欠けている。彼の詩人としての力は我々が彼に期待したところの深い宗教的感情と鋭い思想とを総合させた作品を作り上げるには足りなかつた。彼は神秘主義を通じて近代的個人主義への道を開き、バロック的二元性を克服する事が出来なかつた。この目標に向つて最初は輝かしい出発をしながら、彼は途中で挫折してしまつた。この挫折もまたバロック的のなだと見えよう。

17世紀には西欧全土に亘つて神秘主義思想の復興が見られた。しかしこれは——少くともドイツに関しては——幅広い宗教運動にはならなかつた。神秘主義はそれ自体としては少数者のものである。Scheffler の属した Franckenberg-Kreis のような選ばれた少数者の集まりとしてしかそれは存在しなかつた。この事がオランダ・イギリスに於ける敬虔主義とは異なるところである。また

その成員は古い宮廷文化人に代つた新しい中流知識階級の人々ではあつたが、それはまだ近代的な個人の集まりではなかつた。彼等バロック時代人は結局は自分の属する社会を生きただつた。彼等の考えも感情も個人的なものではなく Gemeinschaft 的なものであつた。

バロック時代は、宗教改革時代に引続いて、近代社会への転換期であつた。宗教改革時代には、その精神的役割の重大さにくらべて、新しい文学の動きはまだ殆んど見られなかつた。バロック時代に入つて新しい文学傾向の発生、新旧文学傾向の混在がはつきりと示されて来るのである。だが近代社会、近代文学の成立は次の世紀を待たねばならなかつた。17世紀神秘主義の (Scheffler の) 意義は、それが人間の内面性を深く求めて文学に個人的内面世界への道を開き、敬虔主義を通じて個人主義的主観主義を準備した、Gesellschaftsdichtung から Erlebnisdichtung への道を開いたことである。

Scheffler の作品は Gottfried Arnord (1666—1714)

に影響を与えたが、其後18世紀の間は忘れられていた。19世紀に入つて Romantik 時代以来再び認められるようになった。

Literatur

Angelus SILESIIUS : Sämtliche Poetische Werke
3 Bde. hrsg. v. H. L. Held (1952)

K. VIÉTOR : Geist u. Form (1952)

F. W. WENTZLAFF-EGGEBERT : Deutsche Mystik
zwischen Mittelalter u. Neuzeit (1947)

G. ELLINGER : Zur Frage nach den Quellen des
C. W., Zeitschrift f. dt. Philologie, Bd. 52, S. 127—37.

B. v. WIESE : Die Antithetik in den Alexandrinern des A. Silesius, Euphorion, Bd. 29, s. 503—22.